

キャリア教育科目における Moodle を活用した相互評価学習方法の改善

Improvement of the Method of Peer Assessment Learning for Undergraduate Career Education Course

桑原 千幸^{*1,2}, 喜多敏博^{*1}, 合田美子^{*1}, 鈴木克明^{*1}
Chiyuki KUWAHARA^{*1,2}, Toshihiro KITA^{*1}, Yoshiko GODA^{*1}, Katsuaki SUZUKI^{*1}

^{*1}熊本大学大学院教授システム学専攻

^{*1} Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

^{*2} 京都文教短期大学

^{*2} Kyoto Bunkyo Junior College

Email: ckuwahara@po.kbu.ac.jp

あらまし: 短期大学の初年次キャリア教育科目において進路選択自己効力を向上させることを目的とした相互評価学習を実施した。実践後の受講生のアンケート調査から相互評価学習方法とシステムの観点から授業デザインの改善を検討した。相互評価学習システムの使いやすさについて受講生の 94.3%が肯定的に回答し、相互評価学習についても肯定的に受け止めていることが分かった。一方で、自由記述の分析から、評価対象者の割当方法、評価入力時間の確保、評価対象選択画面での表示方法、評価入力フォームについてそれぞれ改善の必要性が明らかになった。

キーワード: キャリア教育, Moodle, 相互評価学習, 授業デザイン

1. はじめに

キャリア教育の目的の一つに、他者との相互作用の中で自己理解を深め、主体的なキャリア形成能力を育成することが挙げられる。筆者らはこれまで、他者とのやり取りを通じて進路選択自己効力を高める方法として短期大学生を対象に Moodle を活用した相互評価学習を実施し、実践前後で進路選択自己効力が有意に向上することを明らかにしてきた⁽¹⁾。そこで本研究では、さらに有用な相互評価学習方法を開発するために、実践後の受講生のアンケート調査を分析し、相互評価学習方法とシステムの観点から授業デザインの改善を検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 対象

私立短期大学において、2015 年度前期に 1 年次選択科目として開講されたキャリア教育科目「キャリア形成論」 2 クラスの受講者 58 名を対象とした。

2.2 授業実践の概要

短期大学 1 年次にキャリア意識と進路選択自己効力を高めることを目的として、進路選択課題に関わる相互評価学習を中心とした授業を設計した。進路選択課題は「キャリアプランの作成」であり、現在の自分についての客観的な自己理解をもとに、卒業から 10 年後までの理想的なキャリアプランとその実現方法を考え、プレゼンテーションを作成・発表するという内容である。第 1 回～第 9 回は、キャリアプランの作成に必要な社会状況についての知識習得や自己理解を目的として、ワークシートを活用した講義を行った。第 10 回～第 15 回で、キャリアプラン作成、成果物の相互評価（1 回目）、成果物の改善、発表と相互評価（2 回目）を行った（表 1）。

表 1 相互評価学習の流れ

回	詳細
10	キャリアプランワークシートの作成
11	プレゼンテーションソフトウェアの使用方法を説明後、キャリアプランを作成
12	キャリアプランのファイルを Moodle に提出 評価基準の説明と評価の練習 <u>Moodle 上でファイルを閲覧して相互評価(1)</u> キャリアプランの改善
13-14	<u>キャリアプランのプレゼンテーションと、発表</u> <u>に対する相互評価(2)</u>
15	発表の動画を閲覧して自己評価を入力する 自己評価と他者評価の比較

2.3 相互評価学習の方法

授業全体で Moodle の課題モジュールや投票モジュールを利用しており、受講生が基本的な操作に慣れていることから、相互評価学習システムとして Moodle ワークショップモジュールを採用した。

評価対象の割当について、モジュールにはランダム割当機能があるが、本実践では発表時にプレゼンテーションを実際に見ながら評価入力を行うため、評価対象者が連続しないこと、評価活動が自身の発表の妨げにならないことに留意し、教員があらかじめ発表順をもとに適切に評価活動を行えるように、評価者 1 人につき評価対象者 5 人を割り当てた。互いに評価を行うようなグループの形成、評価対象者から評価を受けることによる「お互いさま効果」⁽²⁾等の考慮はしなかった。評価対象画面上ではクラス全員を一覧表示させ、受講生は割当表をもとに自身の評価対象者を探してクリックする方法を採った。なお、学習者は、第 12 回～14 回で同一の評価対象者に対して評価を行うため、成果物の改善過程を把

握して評価が可能である。

評価基準として、「自己理解」「キャリアプランの目標」「キャリアプラン実現のためにすべきこと、将来への意欲」「スライドの表現」「言語コミュニケーション」の6項目について、5段階のルーブリックをあらかじめ学習者に提示した。Moodle ワークショップモジュールでの評定方法は「累積評価」とし、6項目をそれぞれ5点で評価する方式とした。評価入力画面のキャプチャを図1に示す。アスペクト(評価項目)毎にコンボボックスで点数を選択し、コメントを入力できるようになっている。コメントについては、入力時間に制約があるため、アスペクト毎ではなく1カ所にまとめて入力するように指示した。コメントの内容については、「よくできているところを積極的にほめる」と同時に、「ここをもう少しこうしたら良いというアドバイス」もするように促した。

図1 評価入力画面

2.4 調査方法

第15回に Google フォームで調査を行い、有効回答数は53件であった。自由記述テキストについて、MaxQDA12を用いて、コードを付与しカテゴライズを行った。質問項目は「相互評価学習システムは使いやすかったか(5件法)」「相互評価学習のやり方やシステムについて、評価する・される人数や画面の使い方など、感想や要望を自由に述べてください(任意の自由記述)」である。

3. 結果

3.1 相互評価学習システムの使いやすさ

「とても使いやすかった」26名、「まあまあ使いやすかった」24名、「どちらともいえない」3名であり、94.3%が肯定的に回答をした。

3.2 相互評価学習の方法・システムについて

相互評価学習方法やシステムに関する感想や要望の自由記述テキストをコーディングし、カテゴライズしたコードシステムの分析結果を図2に示す。

相互評価学習そのものに関する記述は9件あり、他者から評価を受けることへの肯定的意見が6件、他者を評価することへの肯定的意見が1件あった。他に、匿名評価への肯定が1件、評価をすること自体への肯定が1件であった。

相互評価学習方法については15件の記述があっ

た。学習方法について、「発表中にたくさんのコメントをするのは、どっちかがおそろかになってしまうので、すべて聞き終わってから感想を書きたい」「評価をする人が詰まっていたので少し大変でした」といった意見があった。また、評価人数については、11件すべてが評価する・される人数として適切であるという記述であった。

相互評価学習システムに関する記述は、肯定的評価が18件、否定的評価が6件であった。肯定的評価では「使いやすかった」「紙とは違った便利さがあった」「簡単に相互評価ができる」といった意見があった。一方で、否定的意見のうち3件が評価対象選択画面に関するものであった。他には、コンボボックスよりもラジオボタン形式の方が評価しやすい、アスペクト毎にコメント欄があるのが煩雑、改善点を書く場所がほしい、といった意見が得られた。

コード	回数
相互評価	2
他の学生を評価すること	1
他の学生から評価されること	6
相互評価学習方法	0
進め方	4
人数	11
システム	0
否定的評価	3
評価対象の選択	3
肯定的評価	18
セット	0

図2 コードシステムの結果

4. 考察

相互評価学習について受講生は肯定的に受け止めており、システムの使いやすさについても94.3%が肯定的回答をしていることが明らかになった。一方で、自由記述からは、プレゼンテーションを聴きながら評価を入力する慌ただしさ、評価対象の連続についての不満がみられた。相互評価学習の進め方については、評価対象者の割当方法の見直し、プレゼンテーション聴講後に評価入力時間を設けるといった改善策が考えられる。また、相互評価学習システムについては、評価対象割当表示と、評価入力・コメント入力への改善要望が複数件見られたため、評価対象選択画面での表示方法と、評価入力フォームについて Moodle のモジュールのカスタマイズの可能性を検討していきたい。今後は、相互評価学習方法とシステムの両面から授業デザインの見直しを行い、より有用な相互評価学習モデルを検討していきたいと考える。

参考文献

- 桑原千幸, 喜多敏博, 合田美子, 根本淳子, 鈴木克明: “初年次キャリア教育科目における相互評価学習の実践と進路選択自己効力の向上”, 日本教育工学会論文誌, 第38巻, 第2号, pp.79-89 (2014)
- 藤原康宏, 大西仁, 加藤浩: “公平な相互評価のための評価支援システムの開発と評価: 学習成果物を相互評価する場合に評価者の選択で生じる「おおい様効果」”, 日本教育工学会論文誌, 第31巻, 第2号, pp.125-134 (2007)